

book

最近、おもしろかった本

『オトナ語の謎。』

糸井重里 監修 ほぼ日刊イトイ新聞 発行 1,365円(税込)

何はともあれ「お世話になっております」「お疲れさまです」

本屋に平積みされた黄色と黒の表紙に目をとられてふと手に取ったが、立ち読みを始めてすぐ「立ち読みは危険」と判断し、そのまま買ってしまった本である。

「オトナ語」とはなんぞや?ということであるが、文字どおりオトナの言葉、オトナ社会の用語を指す(そして、この「なんぞや?」も「オトナ語」として紹介されている)。本書は、不正確を承知であえて一言でいえば、かかる「オトナ語」の定義や用法を述べた辞書である。元ネタは、ホームページ上の連載と、反響の書込みとのことであり、糸井重里個人色というよりはいわゆる掲示板ノリの雰囲気強い、「という理解です」(オトナ語)。

紹介されている「オトナ語」は、「お世話になっております」「よろしくお願いたします」など、ごくごく基本的な用語から始まり、カタカナ語、オフィス内の用語、交渉用語、時代劇っぽいものやスポーツっぽいものなど、なんだかよく分からないが不思議と違和感のない基準で分類されている。

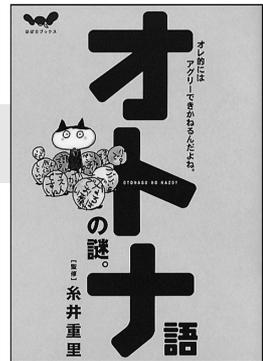
本書のキモは、取り上げている言葉それ自体より、その説明や用例の紹介にある。筆者お気に入りのものをいくつか挙

げれば、「そうなんですー」のニュアンス、「怒られた」その理由、「失礼ですが……………」の沈黙の意味、「遅くなりまして。」で止める理由。などなど。そのほか、「エース」「エースくん」、「悪くないですね」「悪くはないですね」、「バンザイ」「バンバンザイ」等々、対比して楽しめる表現も。

社会人にとっては娯楽書であり、かつ学生や新卒社会人にとっては十分実用書になりうる本である。事実、登録1年目の筆者も、笑いつつかなり勉強させてもらった感がある。外国人向け「ビジネス日本語」講座の副読本として採用することなど、真剣に検討する価値があるのではなかろうか(少々言い過ぎ)。

普段無意識に使っている言葉も、こうして切り取って俎上に載せて分析すると、無意識に潜んでいる気遣いや自己犠牲、あるいは自己弁護や悪意がありありと浮かび上がってきて、可笑しい反面なかなか恐ろしいものである。そして、そんな「オトナ語」の裏に潜む思惑に気付くニンゲンがいようがいまいが、何事もなかったかのようにオトナ社会は今日も回っていくのである。

(会員 人見 高德)



cinema

心に残る映画

『ピクニック』1936年／フランス／ジャン・ルノワール監督作品 登場人物見つめる監督の優しい眼差し

『ピクニック』は、1936年に長編映画として撮影が開始されたが、ロケ地で雨に祟られ、やむなく撮影中止に追い込まれたフィルムを素材に、後年、約40分の中編作品として編集されたものである。

監督ジャン・ルノワールは、印象派の巨匠オーギュスト・ルノワールの次男で、世界的に評価されている映画作家であり、また、1960年代のフランスにおける映画革新運動「ヌーヴェル・ヴァーグ（新しい波）」の映画作家たちは、みな彼に最大限の賛辞を贈って自らの「父」と見なしてきた。

パリから郊外へと家族とともにピクニックに訪れた娘（婚約者も一緒に来るが、これが最悪の男…）が、そこで魅力的な青年と出会い、そして別れるという極めて単純なストーリーでありながら、登場人物、そして舞台となる自然に対するルノワールの限りない愛情がダイレクトに伝わってくる。



『ピクニック』DVD
価格：5,040円(税込)
販売元：紀伊國屋書店

また、それにも増して、彼の作品に通底する生きる喜び、生きていることの実感をまざまざと見せつけ、彼の優しい眼差しから登場人物を見つめた本作品のような映画は、既に利益至上主義のハリウッド映画が全世界を席卷し、作家主義が失われつつある現在、二度と現れることはないであろう。

あまりにも美しい自然（モノクロームでありながら、瑞々しい色彩を感じさせずにはいられない）と、そこで繰り広げられる出会いと別れの物語は、時代を超えて我々の感情を強く揺さぶる普遍性を持っている。

なお、前述のとおり本作品は未完のまま編集され、物語をつなげるための字幕が2箇所挿入されているが、実際に鑑賞すると、足りないシークエンスは1つもないと断言できるほど完成された作品であって、映画史に残る傑作であることは疑いを挟む余地がない。
(会員 篠原一廣)